

令和 5 年 5 月 30 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19H00533

研究課題名(和文) データ繋留型編纂支援・資源化システム構築と歴史情報データベースの次世代展開

研究課題名(英文) Construction of Mooring Information Database on Historical Materials for Compilation Support and Academic Resource Promotion and Next-generation Deployment of Historical Information System

研究代表者

山口 英男 (YAMAGUCHI, Hideo)

東京大学・史料編纂所・教授

研究者番号：40182456

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 34,600,000円

研究成果の概要(和文)：歴史情報データベース(DB)が日本史研究に不可欠のインフラとなった状況を受け、電子的形態でこそ得られる研究利便性を視野に入れた歴史情報DBの次世代展開への指針を提示する問題意識から、史料編纂所歴史情報処理システムSHIPSに「編年史料編纂支援資源化DB MIDOH」と、その付加機能「歴史情報コールシステムHICAL」を開発した。これにより既存の編年史料集の成果と新規の成果との融合的・総合的な利用環境を提供し、平安時代以前に関する網文・書目・史料本文のデータ合計約289,000件を公開した。また本システムの効果検証のため、DBの形で提供する新たな史料集として『九世紀編年史料』を編纂・公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

歴史研究と歴史理解を深める基盤である史料記述への総合的なアクセスに大きな効果を発揮するデータベースMIDOHの構築・公開を実現した。史料集編纂の既存・新規の成果を融合的に利用できる環境の重要性を明確にし、電子的方法でこそ可能となる史料解析の効率化という歴史情報DBの次世代展開への指針を示した。中でも、高度な学術成果でありながら分散的な利用にとどまっていた自治体史編年史料の総合的な利用環境を提供したことは、学術面だけでなく、市民を対象とした社会還元の数でも大きな意義がある。web公開のためのプラットフォームとしての利用事例が生まれており、今後の自治体等関係機関と連携した展開も期待される。

研究成果の概要(英文)：In response to the fact that historical information databases have become an indispensable infrastructure for Japanese history research, in order to present guidelines for the next generation development of historical information databases with a view to research convenience that can only be obtained in digitized form, we have developed a database called MIDOH and its additional function "Historical Information Call System HICAL". As a result, we have provided an environment in which old and new collections of historical materials can be used in an integrated and comprehensive manner, and have released a total of approximately 289,000 items of historical material data before the Heian period. In addition, in order to verify the effectiveness of this system, we have begun compiling and publishing a new collection of historical materials in the form of a database called "Nine-Century Chronological Materials 九世紀編年史料".

研究分野：日本古代史

キーワード：歴史情報データベース 編年史料 平安時代史 史料編纂 歴史研究基盤整備 MIDOH HICAL 自治体史

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始の時点において、歴史情報 DB は日本史研究にとって不可欠のインフラとあってよい存在にまで成長し、研究環境に大幅な改善がもたらされつつあった。歴史情報 DB は、各種データの集積・公開と、歴史ナレッジベースとしての整備の形で展開し、史料目録データ、全文データ、索引データ、画像データなど、多様な形態のデータの集積・公開と、種々の利用形態に応じたメタデータの付与が進められてきた。紙媒体ではなく、電子媒体から情報を得られるようになることで、史料収集の効率は格段に向上した。しかしながら、電子的形態だからこそ可能になる研究利便性実現への視野の広がりには十分でなく、研究利用の方法自体に変革をもたらすことへの意識は薄かった。

歴史研究は、史料記述の収集とその解析という作業の積み重ねを基盤として成り立っている。DB 成立以前から、先人による基礎作業の蓄積を後進が受け継ぐことで、学問分野の発展が支えられてきた。そうした伝統的な方法論を、歴史情報 DB の発想の中に意識的に取り入れる観点から、研究代表者は「データ繋留型 DB」を提唱してきた。それに基づいた歴史情報 DB の次世代展開への指針を示すことを本課題の基本構想とした。

同時に、歴史情報 DB の展開の中で次のような懸念も感じられた。それは、従来から存在する成果と、電子媒体の形で提供される成果との融合的な利用環境が十分でない点である。史料情報・歴史情報の電子的提供が普及することで、ややもすれば電子的検索でヒットしない情報は世の中に存在しないも同然に扱われかねない。歴史研究・歴史理解の場面でも、そうした風潮が広まることは決して杞憂ではない。過去と現在の成果の双方に等しく目を向ける学術環境の構築が、歴史研究を担う立場からの一つの責務となっている。

## 2. 研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究課題では、混成・集積された情報群を、年月日と網文(歴史事象の概要を簡潔に説明した文章)を「ブイ」として、そこに繋留するという方法論を用いた歴史情報総合 DB システムを構築することとした。これは、『大日本史料』あるいは時代をさらにさかのぼって伝統を有する編年史料集編纂という学術的営為の継承に他ならない。史料解析を支援・促進し、既存・新規双方の解析成果の一体的な学術資源化を図り、これまでにない新たな利用形態・利用環境を提供すること、それを通じて歴史情報 DB の次世代展開への指針を示すことを本課題の目的とした。

## 3. 研究の方法

この目的を実現するため、本課題では、データ量の拡大だけでなく、研究支援の面で画期的な効果をもたらす次世代歴史情報 DB を、編年史料集編纂のためのノウハウの蓄積を踏まえて構想した。それが、史料編纂所歴史情報処理システム SHIPS 上に開発する「編年史料編纂支援資源化データベース MIDOH」と「歴史情報コールシステム HICAL」である。これにより、史料の編年解析(編纂)と研究支援の推進、従来から蓄積されてきた成果と融合させた形のデータ公開、電子媒体でこそ可能となる研究利便性の提供、という3つの効果を達成するとともに、実際にも平安時代史料に焦点を当てた史料解析作業を進行させることでシステムの効果を検証し、平安時代史の研究環境高度化を図る計画とした。

## 4. 研究成果

### (1) システム開発

編年史料編纂支援資源化 DB MIDOH のシステム構築では、2020 年度に入力校正システム、2021 年度に公開検索システムの開発を完了し、2022 年 6 月の限定公開を経て、同 12 月より一般公開を開始した。また、MIDOH を利用した史料解析を効率化する付加機能として、歴史情報コールシステム HICAL の開発を 2022 年度に完了した(HICAL は稼働の安定等を確認のうえ後日公開予定)。MIDOH へのアクセスは 2023 年 1~3 月の合計で約 59,000 件に達した。

MIDOH は、編年形式の史料集を DB として公開するためのプラットフォームとなりうる形の内容構成とし、年月日を付して歴史事象の概要を述べた網文のもとに、その事象について記述のある史料の名称(書目)、書誌事項、史料本文、校訂・編纂情報等を繋留する DB である。既存と新規双方の編纂成果を融合的・総合的に利用できる環境を提供するとともに、新たな史料解析と編纂支援の作業に効率化をもたらすものである。

HICAL は、SHIPS を構成するフルテキスト系データベース等と連携させ、史料に記述されている語句をマウスで指定しワンクリックするなど、簡便な手順で出典史料の全文を呼び出すシステムで、これにより史料記述を扱う作業効率の飛躍的向上が実現される。

### (2) データ生成・公開

MIDOH に搭載するデータとして、自治体史編年史料及びその他編年史料類あわせて 34 種について網文 32,400 件、書目 45,600 件(件数は概数、以下同じ)のデータを生成・登録した。ま

た、平安時代を収録範囲とする『大日本史料』第一～三編（網文 **36,500** 件、書目 **100,100** 件、本文 **32,100** 件）と同じく『史料総覧』の『大日本史料』未刊範囲（網文 **18,500** 件、書目 **42,600** 件）について、**SHIPS** のデータを共用・移行して搭載した。なお本文データの一部は新規に生成した。さらに、**MIDOH** を利用して新規に編纂を始めた『九世紀編年史料（貞観 仁和）』の成果（網文 **650** 件、書目・史料本文 **1300** 件）を登録した（下記（3）も参照）。これらにより、平安時代史料へのアクセスと研究環境に大幅な改善がもたらされた。また、山梨県編『山梨県史』資料編四（古代編年史料・駒牽編年史料）について、網文・書目とともに史料本文データ **1770** 件を登録・公開した。関係機関との連携のもと、自治体史編年史料集全内容の **web** 公開を **MIDOH** をプラットフォームとして実現した事例として特記される。**2022** 年度末時点で **MIDOH** から一般公開しているデータは、平安時代以前の歴史事象に関する網文 **79,000** 件、書目 **176,000** 件、史料本文 **34,000** 件である。

### （3）編年史料解析

平安時代を対象とする編年史料編纂の実際の作業を行うことで、**MIDOH** のシステムを検証する趣旨から、『九世紀編年史料（貞観～仁和）』の編纂を行い、準備の整った網文 **386** 件、書目及び史料本文各 **817** 件を **MIDOH** から公開した。これ以外にも、編年解析支援のための史料記述情報 **30,000** 件のデータを生成し、**SHIPS** で既に稼働している「編年史料カードデータベース **CHROH**」への入力を進めた。『九世紀編年史料』は、印刷物ではなく、当初からデータベースの形で発行・公開する史料集である。こうした形態は、東京大学史料編纂所の **120** 年を超える編年史料集刊行の歴史の中で初の試みであり、全国的にもほぼ類例のない画期的な成果といえる。版面生成工程を必要とせず、一覧性を損なわない形での網文・史料の補遺を臨機に行うことができるなど、紙媒体（印刷）の史料集と異なる利便性があり、その活用が期待される。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山口英男	4. 巻 839
2. 論文標題 古代の馬の生産と地域社会	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 29-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山口英男	4. 巻 0
2. 論文標題 貢馬をめぐる牧の諸相	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 佐々木虔一・川尻秋生・黒済和彦編『馬と古代社会』（八木書店）	6. 最初と最後の頁 107-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山口英男	4. 巻 0
2. 論文標題 装おう小治田人公口状とその背景	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 古瀬奈津子編『古代日本の政治と制度 律令制・儀式・史料』（同成社）	6. 最初と最後の頁 247-273
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山口英男	4. 巻
2. 論文標題 畿内近傍の牧と馬寮の馬	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 広瀬和雄・山中章・吉川真司編『講座畿内の古代学』 軍事と対外交渉（雄山閣）	6. 最初と最後の頁 60-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山口英男・稲田奈津子	4. 巻 58
2. 論文標題 『九世紀編年史料（貞観 仁和）』（第一期公開）編纂報告	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東京大学史料編纂所報（第58号掲載予定）	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>編年史料（古代）編纂支援資源化データベース MIDOH  <a href="https://wwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/w28/search">https://wwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/w28/search</a>          （東京大学史料編纂所情報処理システムSHIPS）</p>
---

6. 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	稲田 奈津子  (INADA Natsuko)  (60376639)	東京大学・史料編纂所・准教授   (12601)	
研究分担者	末柄 豊  (SUEGARA Yutaka)  (70251478)	東京大学・史料編纂所・教授   (12601)	
研究分担者	大隅 清陽  (OOSUMI Kiyoharu)  (80252378)	山梨大学・大学院総合研究部・教授   (13501)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	伴瀬 明美  (BANSE Akemi)  (90292797)	大阪大学・文学研究科・准教授    (14401)	
研究分担者	新井 重行  (ARAI Shigeyuki)  (60396934)	東京大学・史料編纂所・准教授    (12601)	
研究分担者	黒須 友里江  (KUROSU Yurie)  (20781438)	東京大学・史料編纂所・助教    (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関